

P-017

医学情報分野の震災支援～日本赤十字社医学図書館のサポート～

日本赤十字社医療センター 医学図書室

あまの
天野いづみ

【はじめに】東日本大震災により、被災した赤十字病院図書室では書架の倒壊、書籍の落下、散乱や破損等で図書室機能が失われた。そこで、Web版「日本赤十字社医学図書館（以下医学図書館）」機能を活用し、全国の赤十字施設の協力の元、文献無償支援を実施した。また国内外の出版社からのデータベース、電子ジャーナル等の無償支援についても合わせて報告をする。

【目的】1.被災施設の図書室担当者の院内他業務援助、または図書室の片付けにより、業務が履行できない場合の支援。2.所蔵資料が利用不可能な施設に対し、震災関連の医学情報を含め、職員が文献依頼に早急に応える。3.医学図書館に集まる出版社からの無償支援の情報を、各施設に早急に広報する。

【期間】業務支援は3月16日～5月31日。出版社の無償支援は各社の定める期間。

【方法】1.業務支援としては、職員からの文献依頼を医学図書館が受け、代行して文献の所蔵確認をし、所蔵の赤十字施設に依頼をする。赤十字内に所蔵のない文献は、JMLAの「震災復興支援文献無料提供活動」を利用した。2.文献は、ファックスやメール、郵送にて送付した。3.出版社の電子ジャーナル等の無償支援では、メール添付の許諾を受け、情報を医学図書館上に掲載し、各施設への告知を迅速に行った。

【結果】文献の申込施設は3病院、147件。赤十字施設内から97件、JMLAからは42件の提供を受けた。またオープンアクセス文献は8件であった。Elsevier出版社の支援文献は、全国の赤十字施設から72件の依頼を受けた（2011年5月31日現在）。

【おわりに】災害時、図書室での支援を考え、文献無償支援を行ったが、各施設の職員において医学図書館の利用がまだ十分でなく、情報の広報が不十分であった。また赤十字施設内の資料を円滑に共有できるシステム作りが今後の課題である。

P-019

個人携帯用手指消毒剤導入におけるMRSA新規検出患者数の変化

さいたま赤十字病院 薬剤部¹⁾、さいたま赤十字病院 ICT²⁾

いが まさのり
伊賀 正典^{1,2)}、福田 真弓²⁾、田口 茂正²⁾、
高屋 俊樹²⁾、阿保 一茂²⁾、大川 直美²⁾、猪股 克彦¹⁾、
藤掛 佳男¹⁾

【はじめに】当院ICTは院内採用速乾性手指消毒剤（以下、手指消毒剤）を見直し、個人携帯用手指消毒剤の導入を2010年6月より開始した。ICTにおける院内感染対策に対する取り組みを手指消毒剤見直し前後のMethicillin-resistant *Staphylococcus aureus*（以下、MRSA）新規検出患者数の変化から評価したので報告する。

【対象および方法】全入院患者を対象とし、手指消毒剤変更前2009年8月～2010年5月と変更後2010年6月～2011年3月の各々10カ月間における手指消毒剤在庫量、薬剤費およびMRSA新規検出患者数を算出し、手指消毒剤変更前後における有意差検定を行った。

【結果】手指消毒剤変更前後において延べ入院患者日数に有意な変化は認められなかった。手指消毒剤在庫量は333,500mLから483,935mLと導入後において有意に増加し（ $p=0.005$ ）、MRSA新規検出患者数は12.9件/10,000 patient daysから8.4件/10,000 patient daysと導入後において有意に減少した（ $p=0.016$ ）。消毒剤の薬剤費は867,100円から992,628円と導入後に増加を示したが有意な差は認められなかった。

【考察】手指消毒剤変更において在庫量は有意に上昇し、MRSA新規検出患者数は有意な減少を認めた。ICTの手指消毒剤への取り組みはMRSA新規検出患者数減少に貢献できたと考えられる。

P-018

持ち込まれるMRSAをどう防ぐか

足利赤十字病院 感染対策チーム

こばやし ゆみえ
小林由美江、川島千恵子、三田恵美子

【はじめに】2010年に他施設から搬送された患者のMRSA持ち込み率は、平均64.7%であり、当該病棟ではMRSA伝播を防止するために様々な取り組みを行ってきた。その取り組みの一貫として入院前の施設へアプローチした結果、他施設からのMRSA持ち込みが減少したと共に施設内伝播も減少したので報告する。

【方法】2010年10月～11月に搬送された患者の中でMRSA陽性率が高かった2施設を対象とした。MRSA検出状況の共有後、平時の感染対策について訪問先の看護師長にヒアリングを行った。その後、ATP測定器を用いて交差感染の原因になりやすい場所の拭き取り調査を実施し、汚染度が高い場所について改善策の提案を行った。

【結果】2010年8月～11月のMRSA陽性率5.1%うち持ち込み件数12件（56.7%）、訪問後12月～3月のMRSA陽性率3.0%うち持ち込み件数9件（78.8%）であった。他施設訪問で、交差感染の原因になりやすい高頻度手指接触表面のATP拭き取り調査を行った結果、平均ATP値は体重測定器、乳児室コット、インファントウォーマーでそれぞれ14709、2341、13262と汚染が著明であり、これらを介した医療従事者、母親、新生児間の伝播が示唆された。

【結論】市中感染MRSAの増加に伴い容易に施設内に持ち込まれ、その対策に多くの施設が苦慮している。自施設の新生児室においても同様な状況から、今回他施設へのアプローチを試みた。2施設のヒアリングの結果からは、検査にかかるコストから培養検査は実施できない。また感染対策に係わる資金確保もままならない現状があった。しかし、この取り組みにより具体的な感染対策を提案することが可能となった。結果、2011年4月現在MRSAの持ち込みは減少し、それに伴い新生児室内での伝播も減少した。このように中核病院が中心となり地域の医療施設との連携を図ることが耐性菌制御の鍵となることが示唆された。

P-020

当院ICUでのMRSA感染対策の取り組み

京都第二赤十字病院 看護部¹⁾、京都第二赤十字病院 感染制御部²⁾

ほりうち
堀内みどり¹⁾、坪倉 有岐¹⁾、工藤 真紀¹⁾、新 カヨ¹⁾、
野口千加子¹⁾、森下ひろえ²⁾

【目的】質の高い医療・看護を提供するための要件として感染管理は大きな意義を持っている。今回MRSAを発症した患者が増加したことを受け、感染対策チーム（ICT）のリンクネースとして標準予防策と経路別予防策の浸透と感染対策上の問題点の解決を目標として本研究に取り組んだ。

【方法】期間：2010年5月1日～2011年3月31日 対象：A病院ICU看護師42名

方法：標準予防策についてのアンケートと擦式アルコール製剤の使用量を以下の取り組み前後に調査し比較する。

感染対策内容（1）擦式アルコール製剤での手洗い、手袋・マスク・ガウンの着脱方法の講習（2）感染対策の疑問をスタッフに募り、回答を一覧表にして掲示（3）院内感染制御部とともにオーデットを実施（4）（3）の報告書をもとに標準予防策、接触感染予防策の講義（5）ICU入り口にコートハンガーを設置し白衣を脱ぎ、手洗い、マスク着用して入室するようアナウンス、ポスター掲示（6）感染症患者のモニター画面の横と足元のベッド柵にある患者リストバンドの横に経路別対策パネルを表示（7）ナースステーションの患者板に感染症のステッカーを貼り感染部位を記入、各勤務で申し送る（8）グリッターバグを用いた手洗い方法の評価

【結果・考察】取り組み後のアンケートでは「いつもできている」「だいたいできている」が平均93%で、擦式アルコール製剤の使用量も約6倍に増加していた。しかし、環境接触後の手指消毒や人工呼吸器回路に触れる際の手袋着用が不十分であることがわかった。

10月20日(木)
ポスター1